

## 日本における中国古典文学研究の現状

—日本漢学との関連の中で—

牧角悦子

\*本稿は、二〇一九年九月九日に中国開封市の河南大学文学部において行った講演の記録である。

### はじめに

みなさんこんにちは。二松学舎大学の牧角です。私は文学部中国文学科で中国の古典を教えています。本日は日本語学科の何暁芳先生のご依頼を受けて、日本における中国古典文学研究の現状と、日本漢学についてお話いたします。

私は開封の河南大学に来るのは、今回で三回目です。一回目はちょうど二年前に、「中国古代史論壇」という国際シンポジウムで訪問しました。二〇一七年の八月でした。この論壇は、中国社会科学院の歴史研究所と、日本の東方学会の共催で、日中両国で毎年開催しているものですが、その第九回の論壇の開催校が河南大学でした。古代史論壇ですので、その時は主

に歴史系の先生方と交流しました。

私の専門は、中国における先秦から漢、魏晋南北朝期の文化です。王朝で言えば唐代以前になります。なので、北宋の都である開封については、正直言ってあまり大きな興味がありませんでした。ですので、論壇が終わって帰国する際に、恐らくもう二度と開封を訪れることは無いだろうと思っていました。ところが、意外なことに、半年もせずに、同じ年の十一月に二回目の訪問をすることになりました。それは何先生の所属する日本語学科と二松学舎大学の文学部で、学術交流協定を結ぶためでした。今ちょうど貴学を訪問中の二松学舎の江藤学長とともに訪れた際は、北京から日帰り、極めて短時間でしたが、私にとって二回目の開封でした。そして今回、三回目の訪問となりました。一度きりだと思っていたのが、既に三回目だということは、きっと何かのご縁なのではないかと思いついています。

それは何かと言うと、初めて訪れた際に、宿泊した学内のホテルの壁に、河南大学の歴代の学者の事跡がパネルになって掲げてあったのですが、その中に私の研究にも重要な関連のある何人かを発見しました。その一人が馮友蘭、そしてもう一人が范文欄です。私の博士論文のテーマは「聞一多研究」でした。聞一多という近代の詩人であり古典学者であった文人の、文学研究と近代学術を研究しましたので、中国近代の新しい学術草創期のこの二人の学者が河南大学と深い関係があったことに感銘を受けました。

また、私のもう一方の研究は六朝文学です。最近『文選』に関していくつかの成果を発表したのですが、中国の文選研究で高名な王立群教授もまた河南大学で教鞭をとっていらっしやったことを聞きました。

このように、当初はもう二度と訪れることはないだろうと思っていた貴学とは、二重三重にご縁のある大学だったということです。

前置きが長くなりました。本日は、このようなことを踏まえて、四つのことをお話ししようと思っています。それは、

一、日本の中国古典学と中国文学について

二、漢学塾を母体とする二松学舎大学について

三、「近代日本の『知』の形成と漢学」という二松学舎の研究プロジェクトについて

四、日本語・日本学としての日本漢学について

です。みなさまの研究に少しでも裨益することがあれば嬉しく思います。

## 一、中国古典学と中国文学

今回の講演に、「日本における中国古典文学研究」というテーマを設定してくださったのは、恐らく何先生が私の専門が中国古典文学であることをご存知だったからだと思います。ですので、ここでは特に私自身の立場と考えから、日本における中国学の現状と課題を紹介したいと思います。

私自身は中国学の中でも、特に詩歌の歴史が専門です。古い時代では『詩経』『楚辞』、中世では『文選』と文論（文学批評）、そして近代の文人である聞一多がライフワークです。ですので、中国学の中でも、文学研究という分野に属していることになっていきます。ただ、近年、後に述べる日本漢学のプロジェクトに関わってからは、今現在の日本における学問体系、つまりそれは文系と理系に分かれ、人文学では更に文学・歴史・思想に分類される学問体系なのですが、それが近代以降のものであり、そこには大きな問題が含まれていることに気づきました。つまり「文学研究」という方法そのものに、再検討の必要を感じたのです。たとえば、『詩経』といえ、それは中国最古の詩集だと説明するのが一般的ですが、しかし『詩経』の詩は近代的意味での詩とは大きく異なります。また、六朝期の文論は、「文学批評」という言葉で我々の言うところのものと

は、やはり異なります。それは、「文学」というものが近代の概念であり、近代以前の古典に、それを直接当てはめることは出来ないからです。

私は、中国の古典作品は、近代的概念である「文学」と同質のものとして扱ってはいけないのではないか、という考えを持っています。このような考えは、いまの日本における中国文学研究の世界では、まだ大きな賛同を得ていません。ですので、今の日本の中国文学研究の現状と、私個人の研究態度とは一致しない部分があることをまず表明しておきたいと思います。

その上で、日本における中国文学研究の一般的な現状をご紹介します。日本の中国学は、文学・思想・歴史という三分野に大きく分かれています。歴史研究は最も研究者が多く、中国学というよりは東洋学という括りで、「東洋史」と呼ばれます。文学と思想の区別は、対象の区別と同時に、方向の違い、すなわち文学性を追及するか、思想の内実を問題にするかに分かれます。

また、古典文献の解説に当たって、訓読で読むか、中国語で読むかという二つの態度の違いがあります。日本には漢文訓読法という日本独特の翻訳技術があり、中国語ができなくても古典文献を読むことが出来ます。特に古典語文法（文言文）で書かれた文献は、この訓読法を用いて解説が可能です。英米文学や仏文学の研究の為に、英語やフランス語を習得することが、その前提として必要となります。しかし中国学の分野では、中国語を言語として習得しなくても、訓読という方法でテキストを理解することができるのです。ですので、いまでも中国学においては、訓読と中国語読みという二つの方法が並立して使われます。

さて、文学・思想・歴史と分かれる中国学の中で、近年は中国古典学を志す研究者はとも少なくなくなっています。日本中国学会という全国学会が中国学の総括的な学会ですが、その中国文学分野で発表される研究は、近年では明清以降の小説研究が圧倒的に多く、また小説研究では版本研究が中心です。日本中国学会の他にも、六朝学術学会・三国志学会・中唐文学会など、近世小説以外の分野を対象とする学会もありますが、やはり研究者の減少は明らかです。ですので、今の日本の中国文学

研究は、小説が中心であり、古典学の分野は研究者が少ないということが言えます。また、小説以外の分野では、個別の作品の作品論、あるいは作者論的研究、あるいは新しい方法や新しい概念の応用による作品分析というのが中国文学研究の現在です。

ついでに言えば、すべての分野にわたって、現在では中国人の研究者が年々増加し、中国学会での発表者の中国人率は、既に五割を超えている現状があります。

このような研究動向の中で、私自身の研究成果と問題意識を提示したいと思います。先に述べたとおり、私は「文学」という概念を、古典に直接的に当てはめることに大きな疑問を持っています。古典的な「文」と近代的な「文学」とは、ほんらい異なる概念だからです。その二つを峻別した上で、「文」の中に「文学意識」を探っていくことが文学研究なのだとは考えられません。

古典、特に中世（魏晋南北朝）以前の古典における「文」は、儒教的価値の一部であった、というのが私の考えです。（中国では「儒学」といいますが、日本では「儒教」という言葉を意識的に使います。）「詩言志」の言葉に代表される現実志向、それは王朝の統治が成功しているときは王朝を「美（賛美）」し、失敗しているときは王朝を「刺（批判）」する、所謂「美刺」の精神を言うのですが、王朝統治という現実と、直接的に関わるものとして「文」がありました。漢代から六朝にかけては「賦」という文体がそれを担い、唐代以降は「詩」が中心になります。だとすれば、「詩」も「賦」も、それは個人の抒情とは全く異なる価値の中に在ったと言えるのです。しかし、そのような儒教的「文」の世界に、「文学意識」が自覚されていくのが六朝時代です。魏の文帝曹丕の『典論』『論文』、晋の陸機の「文賦」を経て、梁の昭明太子編纂の『文選』、同時代の『文心雕龍』というように、後世「文論」と呼ばれるこれらの著述では、表現そのものの独立した価値への認識が成熟していきます。これを私は「文学意識」と呼んでいます。ただ、注意すべきは、ここに見られるのは「文学意識」であって、

これらの著述をそのまま「文学」である、と言うことはできない、という点です。これらはすべて、現実的価値を第一義に置く、儒教的「文」について論じたものであって、表現そのものの独立した価値を論ずるものではないからです。

魯迅が建安時代を「文学自覚の時代」と呼んで以来、建安から始まる六朝の文論を、文学批評と位置づけるのが近代の文学史の常識になっています。しかし魯迅は、「文学」を強調する近代という時代背景の中で、敢えてこのように発言したのであって、それをそのまま文学研究あるいは古典研究の視点として墨守する必要は無いというのが私の考えです。

私の問題意識は、このように「文」と「文学」の峻別ということが、最近では第一にあります。昨年出版した論文集『経国と文章——漢魏六朝文学論』では、このような問題意識のもとに、漢の賈誼・楊雄・班固の文論、建安の三曹の文学意識、そして『文選』の編纂意識について論じました。漢代に確立した儒教的価値が、表現世界とどのように関わり合い、そして表現というものの独自の価値が、その中からどのように立ち現れて来るのか、ということ論じたものです。

私のもう一つの研究対象が聞一多（一八九九—一九四六）です。近代の詩人であり古典学者でもあった聞一多は、『詩経』・楚辞・神話という古代を対象に、多くの研究成果を残しています。清朝考証学の硬質な訓詁に、民俗学や考古学などの近代的な方法論を取り込み、さらに詩人的感性と直感に基づく洗練された古典学を残したのです。また、唐代の杜甫の詳細な伝記や、初唐を重視する独創的な文学史構築も優れた業績です。私は博士論文で『聞一多研究——詩と学術』という題目を掲げて、聞一多の詩の創作と古典研究とを総合的に論じました。ただ、最近では、聞一多を研究対象とするのではなく、聞一多と視点を共有しながら古典研究に向かっています。

いま特に集中的に論じたい対象として『詩経』があります。古代歌謡として祭祀の場で集団で歌われていた『詩』は、春秋・戦国を経て漢代にテキスト化されます。三家詩と毛詩という四種類のテキストは、今は毛詩しか残っていません。また儒教経典になったことで『詩経』には現実的道德的解釈が付されるようになります。この時点で既に古代歌謡としての『詩』は、漢代的解釈に変化するのです。『毛詩』は、『春秋左氏伝』と価値観を共有するおそらく前漢後期の解釈ですが、その後、



鄭玄の解釈を経て唐代に五経正義において古注の解釈体系が完成します。宋代になると朱熹が新注と呼ばれる新しい解釈体系を築き、古注を批判します。清朝になると文字学の視点から『毛詩』が読み直され、更に近代になると、古代への新しい視点から、『詩経』は経典としてではなく歌謡として、あるいは「文学」として読み直されることとなります。

つまり、『詩経』という一つの古典は、さまざまな解釈を経て今日に読み継がれてきたものであり、作品と作者、あるいは作品と解釈というものが、近代以降の文学とは異なる体系に属するものです。この『詩経』に代表される中国の古典を、文学とか思想とかいう近代の概念とは異なる視点から、総合的に捉えなおしてみたい、ということを考えています。

かなり一般的ではない古典学の展望をここで述べたのは、近年一気に増えてきた中国人の古典学を志す方々に、期待するところが大きいからです。王立群先生の薫陶を受けた貴校の古典学にとっても期待しています。

## 二、漢学塾を母体とする二松学舎大学

中国の古典学は、漢学とも呼ばれます。私の奉職する二松学舎大学は、もともと漢学塾として出発しました。創立は明治一〇年、一八七八年。今年は創立一四二周年になります。

日本は古くから中国を宗主と仰ぎ、中華文化を先進文化として積極的に学び吸収してきました。日本人が学び受容した中華文化を「漢学」、あるいは「日本漢学」と呼びます。それは中国の文化であると同時に、日本的に変化发展した日本の文化でもあります。近代の明治初期まで、日本人にとって学問といえば、それは漢学だったといっても良いでしょう。

本学の創立者の三島中洲は、江戸時代の松山藩（現代の岡山県高梁市）の儒者でした。藩の政治に関わると同時に、漢学を教授する学者でもあった人です。明治になって、松山藩がなくなり、上京して明治政府に出仕し、大審院の判事や東宮の侍講として大正天皇の学問の師匠でもありました。また、創立当初の東京大学で講師として中国古典の講習も担当しました。明治

一〇年には政治体制が変わり、失職した中洲は自分の住居を改造して漢学塾を始めました。それが二松学舎です。

実は、近代になって古典学や漢学は人々から顧みられなくなってきたかというところ、そうではありません。今で言う国語表現としての漢文・漢詩というリテラシーは、上級学校に進学するため、あるいは公文書の作成のために、必要度の高いスキルでした。ですので、中洲の漢学塾二松学舎はとても人気があり、中江兆民（二八四七―一九〇二）や夏目漱石（二八六七―一九二六）など、名だたる文人が、ここで漢文・漢詩を学んだのでした。

その後、漢学塾二松学舎は、学校制度の変化に合わせて、専門学校となり、新制大学となって現在に至っています。

昨今では、古典学や、とくに中国の古典を学びたいという若者は、それほど多くないのは当然ですが、二松学舎大学は今でも建学の精神を尊び、リテラシーとしての表現能力を中心とし、古典文化の探求を重視する人文学の伝統を守り続けています。

中国の古典を学ぶ若者が減少していることは、上にも述べたとおりです。しかし日本の文化や日本語表現が、多く漢文化を受容して成り立っていることは、ゆるぎない事実です。明治初期に漢学塾が隆盛したことから、人文学の現在の意味は繋がります。日本人にとって漢学とは、中国学としてではなく、日本の文化教養の基幹としてあったということを、再認識する必要があります。

二松学舎では、このような意識のもとに、「日本漢学」という一つの学問の意義を、世界的に発信する事業に取り組んでいます。「21世紀COEプログラム」という文科省の大型科研事業をはじめとして、今現在も「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」という大型科研のプロジェクトに採択され、漢学の重要性を継続的に検証しているところです。

ちなみに、「漢学」という言葉は日本語です。おそらく中国や台湾では、上の説明とは異なる含意で理解されています（中国古典で「漢学」というと、朱子学に対抗する漢唐訓詁学を指し、台湾で「漢学」というとSinologyあるいはChinese studiesを言います）。我々の言う「漢学」とは、漢代の学問、あるいは一般的な中国学、またはシノロジーの訳語としての意味ではなく、日本人の吸収した中華文化とその学問という意味で使います。「日本漢学」という時も同様です。



### 三、二松学舎の大型科研「近代日本の『知』の形成と漢学」——日本漢学という視座

さて、ここでは、現在二松学舎大学が取り組んでいる大型科研について紹介します。タイトルは「近代日本の『知』の形成と漢学」です。特に重要なキーワードは、「近代」と「漢学」です。なぜなら、日本の近代とは西欧化であり、制度も概念もすべて西欧に学んだのであるのだから、旧来的価値である漢学は否定され阻害されたのではないかと、一般的に考えられているからです。本科研で最も主張したいことは、日本の近代化がスムーズに短期間で成功した背景には、江戸時代から高い水準で漢学を身に着けたエリート層が、西欧の学問と制度の受容に当たって、その漢学的素養と応用力を発揮したからだ、という点です。言い換えれば、日本の近代化の地盤は、漢学だったということです。

この科研は、日本の近代において、「知」の体系を形成した人士が、伝統的な漢学の素養を様々なレベルで身に着けていたこと、また新制大学の教育体系の中に、伝統的な漢学から西欧系の技術中心の学問に転換していく様相が見て取れること、また近代文学の担い手たちも、漢学的素養から全く乖離している存在はないこと、これらを個別具体的に検証していく研究なのです。学術研究班では特に学問的視点から、教育研究班では学校制度と教育体系の変化を検証する中から、近代文学研究班では夏目漱石や近代の文学者と漢学の関係性という点から、そして東アジア研究班では近代の知的交流を東アジアという視点から、それぞれ「近代」と「漢学」を中心にすえて研究を続けています。

我々が最も主張したいことは、日本漢学という視座の重要性です。日本漢学は、日本学と中国学との双方に足場を持つ総合学です。純粋な日本文化などというものは存在しません。日本の文化を真に理解するためには、中国の文化を理解しない訳にはいかないのです。しかし、中国の文化と日本の文化を総合的に身につけるなどということは、並大抵の技ではありません。一人の研究者の手には負えないテーマです。であればこそ、日本学の研究者と中国学の研究者が、それぞれ智慧と技を出し合って、そして歴史・文学・哲学など多岐にわたる方法論を駆使して、協力して取り組むことではじめて、中身の有る日本学

が可能になるのだと私は思います。

この四年間にわたって、我々は国内外の多くの研究者・研究機関と学術交流を行い、日本漢学という学問の定着と展開を進めてきました。その中で少しずつ見えてきたことがあります。一つは、日本学における中国古典学の重要性、いま一つには、学問の展開と教育体系形成に文教政策が深くかかわるという事実です。この二点は、特に重要な成果だと考えています。

例えば、私は中国文学を専門としていますが、前の部分で既に述べたように、中国の古典に「文学」という概念を直接的に当てる方法にずっと違和感を持っていました。しかし日本近代における文教政策と大学の成立、その中の学問分野の再編成の過程を知ることによって、この違和感の原因を突き止めることが出来ました。それを次にお話します。

明治初期の段階では、学問世界はまだ江戸漢学の流れを濃厚に反映しており、漢学的文献解読能力の上に、西欧的な技術を受け入れる、言わば「和魂洋才」の時代でした。「和魂」と言っても、それは漢学的素養と修養論です。その上に西欧的な科学技術を身につけ、殖産興業によって日本を富国し近代化することが、この時期に大学においても学術においても求められました。

しかし、このような漢学的要素あるいは漢学的修養論は、日本の近代化の表面上の成功や、日清日露戦争の勝利によって大きく転換し、大正デモクラシーあたりから一気に姿を隠していきました。「洋才」の背景に、「和魂」すなわち漢学の精神修養論を前提する必要性が完全になくなったからです。中国に対する憧憬と敬意が消えたのもこの時期です。

「漢」文化の先進性を前提としていた「漢学」は、ここではじめて相対化されることとなります。漢学的な方法あるいは理念は、「中国」を個別の研究対象として捉えなおす新しい学問方法、すなわち「中国学 (Sinology)」に転換します。中国を中国として捉え、異文化として理解するこの新しい学問方法は、更にそれを「文学」・「歴史」・「哲学」という新しい概念において分析します。ここに中国古典に対する新しい研究視角が誕生したのです。

だとすれば、文学概念の導入という近代的方法論に拠る古典へのアプローチである「中国文学」という方法は、非常に新し

く、歴史の短いものと言わざるを得ません。更に言えば、この新しい研究視角である「中国文学」が対象としたのは、はじめは「紅樓夢」や「水滸伝」などの小説だったことも注意すべき事実です。小説という文体は、中国古典の長い伝統の中では、文字通り「小」なる「説」であり、それは儒教的正統性をもつ「文」の中では価値を持たない文体だったからです。この小説という文体に「文学」としての価値を見出し、新しい文学史に位置づけようとしたのが王国維（一八七七一―一九二七）と魯迅（一八八一―一九三六）だったことは、「文学研究」の出発点が「近代」と「小説」であり、それは伝統的古典的「文」とは異質のものであったことを端的に物語ります。中国古典の「文」に対して、近代的概念である「文学」を直接的に当てはめることの問題は、ここに起因していたのです。

近代における古典学の展開は、日本に限った問題ではないと思います。皆さんの中国でも、長い伝統と大きな文化的価値をもつ「国学」として、それをきちんと価値付けることは重要な任務でしょう。中国の近代における学術については、私は聞かず多研究を中心に幾つかの論及がありますが、今日はそれをお話する時間がありません。ただ言えるのは、中国の近代においては、政治的大混乱の中で、古典学が十分に進化する機会が無かったということです。清末の混乱から辛亥革命が起こります。中華民国成立の後も日中戦争の勃発、その終結後には国共内乱、そして中華人民共和国成立後には文革の時代になります。特に文革期の文化破壊と文人迫害は、中国の古典文化の検証を大きく損なったのではないのでしょうか。

しかしいま現在、経済的發展を遂げた中国が、その伝統文化に対して質量ともに優れた成果を生み出しつつあることを私は知っています。中国古典学の意味を、近代的視点・文学的視点からのみならず、古典学という別の視角から再評価したい、という「総合的古典学」に興味を持ってくださる研究者が生まれることを大きく期待しています。

#### 四、日文学としての日本漢学

私は中国学分野を専門としていますが、日本漢学の研究を通じて、特に近代との関連を担当したことによって、上に述べたような新しい視点を獲得することが出来ました。日本人が長年にわたって培ってきた漢学という伝統は、旧世代の古い価値として捨て去るべきものではなく、古典を古典としてその智慧を汲み取る作業としての学問の価値は、時代を超えて継承すべきものだと考えます。

また、この日本漢学という視座は、日文学を学ぶ研究者にとっても重要なものだと思います。純粹な日本の古典など無い、と上に述べましたが、古典に限らず日本の文化を知るためには、中国の文化を知ることが前提となるのではないのでしょうか。夏目漱石が中国文化に造詣が深く、晩年は小説を書きながら漢詩を書いていたことは良く知られますが、漱石や、また同時代の森鷗外（一八六二―一九三三）・芥川龍之介（一八九二―一九二七）など近代の文学者が、中国や中国文化と深く関わっていただけでなく、日本の現代文化を代表するアニメや漫画、映画やゲームの世界にも、実は漢学的要素はこっそりと姿を隠しているのです。日文学を志す学生さんには、ぜひそれを見つけ出して、新しい日文学の展開を試みていただきたいと思います。

以上で私の話を終わります。ご静聴ありがとうございました。